泉のある家

畑山博

のある家

畑山 博

―― 著 者 紹 介 ――
昭和10年　東京都に生まれる。
昭和47年　『いつか気笛を鳴らして』で
第67回芥川賞受賞。

泉のある家

昭和58年7月5日　第1版発行

著　者　畑山　博
発行者　来馬希木
発行所　社団法人 家の光協会
〒162　東京都新宿区市谷船河原町11
電話／東京03-260-3151（大代表）　振替／東京5-4727
印刷／KK金羊社　製本／寿製本KK

落丁本や乱丁本はおとりかえします
定価は表紙カバーに表示してあります

© Hiroshi Hatayama 1983　Printed in Japan
ISBN4-259-54328-8　C0093

泉のある家／目　次

登校拒否……7
子どもの心……24
児童精神科……41
女の性……58
ザ・マンビキ……75
母親の知恵……91
ふつうの子ども……109
シンナー……126
女の指……143
少女の自殺……159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大決心……175
新しい生活……192
禁断の祭……209
母親は弱くていい……226
すうがく音痴……243
子どもに自信を持たせる法……261
入試作戦……279
春……297
あとがき……316

裝丁　司修

泉のある家

登校拒否

夜八時。
事務所の電話が急に鳴り出した。
恵子(けいこ)は、二階の風呂場でちょうど服を脱ぎかけていた。
下ろしかけたデニムのスカートのジッパーを、あわててまた上げながら、彼女は、ベランダを走り、事務所へ飛びこんだ。
「もしもし。奥さん」
鼻をつまんだような低い声で相手は言った。
「もしもし。恵子さんですね。今晩おひま。スカートの中、おひま?」
おととい、ゆうべとつづけてかかってきたこの声。どこかまだ少年っぽい男の声だ。
「何よ。あんたは」
恵子は、叫んで受話器を睨(にら)みつけた。
睨みつけた受話器の中から、わっという男の子たちの喚声が聞こえた。

と同時に、耳の錯覚だろうか。同じ声が、すぐ背後、事務所の窓の下からも聞こえたような気がした。

受話器を握ったまま、恵子はふり返った。

彼女の経営するこの小さなガラス工場は、二階が事務所。一階が作業場。前庭に小型トラックを置いておくカーポートがある。

声はそこからではなかった。

暗い前庭の向こうに市道があり、すじ向かいが食堂。もうシャッターを閉めたその食堂の脇に、ビールとたばこの自動販売機、それに四角い電話ボックスがある。

明るい電話ボックスのドアが開き、今しも学生服を着た四人の中学生たちが逃げ出して行くところだ。

あっと、彼女は息を呑んだ。

「この間からの電話、みんな、わたしを見ながら、あんなところからかけていたのか……」

明りの中で両手で受話器を握りしめている彼女に向かって、中学生たちの一人が、大きく手をふってみせた。

彼女は乱暴に受話器を置いた。でも向こうのボックスの中の黄色い受話器はまだ、だらんと下がり、揺れている。

追いかけたって捕まえられるはずもなかった。

どうにも気持が収まらなくて、恵子は階下に下りてみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十一月の声を聞くと、秩父の街の夜は寒い。風呂場でさっき脱いでしまったカーディガンのかわりに両手で肩を押さえ、彼女は、ぐるっと前庭の端をまわってみた。

カーポートの柱につけてあるバックミラーが、わずかに母屋の灯を受けて明るんでいる。そのミラーに、少しパーマネントの裾が乱れた顔が映っている。

夫が家を出てしまってから九年間、ずっと一人で三人の子を育ててきた自信と物淋しさが奇妙にないまぜになっている顔。目尻のきつい三十七歳の女の顔が映っている。

車輪がレールの継ぎ目をたたく音が、近づいてくる。

五百メートル離れたセメント会社の第二工場へ回送されてゆく空っぽの貨車の列だ。

恵子は、まだ両肩に手をやったまま少しうなだれながら、線路のある裏手の方へ歩いてみた。

家の裏手には、工場の四人の工員たちが使う風呂場や便所、それにコークスかすを積んだ一階の屋根ほどの高さのあるぼた山。そうしてその先に秩父鉄道の線路がある。

列車の通りすぎた後の線路が、まだかすかに車輪の音を残し、周囲にはセメント粉の臭いが漂っていた。

裏庭を一回りして足早に戻ろうとしていた恵子は、ふと闇の中に人の気配を感じて立ちどまった。

目をこらすと、風呂場の脇の闇の中に、じっと蹲っている人影がある。

「だ、誰っ」

どもりながら、彼女は叫んだ。

声は答えず、かわりに拳で激しく水をたたく音が返った。
「守……守ちゃんなのね」
息をつめて近づくと、壁に寄りかかるようにして蹲っているのは、やはり、今年中学一年になる長男の守だった。
「びっくりするじゃない。何してるの。家の中にいると思ったのに」
恵子は言った。
彼女には顔が似ていない。父親の昇一によく似た眉の濃い丸い顔を、あわててそむけながら、守は、背中を強ばらせた。
息子の手の先には、水をいっぱい張ったバケツがあった。
そうしてその水の上には、どうしてなのか、靴が片方浮かんでいる。
たっぷり中に水を入れられて、その重みのために今にも沈みそうになった、びしょぬれの運動靴だ。
「どうしたの。これ」
また彼女は訊いた。
と、いきなり守は立ち上り、バケツを蹴って逃げて行った。
「守ちゃん。守っ」
呼んでみたけれど、どこへもぐりこんでしまったのか、すぐ足音も聞こえなくなった。
恵子は、ぬれた靴を拾い上げ、ぼうぜんと立ちつくした。

もしかしてもう片方も落ちていないかと探してみたが、見つからなかった。
「やっぱり……でも、まさか」
しだいに乾いてくる喉の中へ、ごくりと唾を飲みこみながら、彼女は闇をすかしてみた。
ここ一か月ほどの間に、もう五足もの靴がなくなっていた。

初めは十月。修学旅行が終って間もないある日だった。
通学用のいつもの運動靴がないと、守がべそかき声で言った。
「靴なきゃ、行かれん」
唇をとがらせながら玄関の上りがまちにしゃがんでしまった守の目に、どこか媚を含んだような気配がちらつくのが、恵子は気にかかった。
仕方なく、その日はサンダルをはかせて、恵子が学校まで送り届けた。そうして午後になって、商店街で買ってきた靴を持って行ってやった。
翌日と翌々日は、守はその新しい靴をはいて登校した。ひどく不機嫌そうな感じでものをしゃべらない日が二日つづいた。けれど、恵子は、忙しさにかまけて、そのことを深く問いただしてみることはしなかった。
ましてやそれが、守が学校へ行かなくなる前ぶれだなどとは気づかなかった。
三日目。買ったばかりの靴がまたなくなった。
近所にいたずらをするような犬はいないし、弟の敏のしわざとも思えなかった。

「靴なきゃ行かれん」
またべそをかいて訴える守に、その朝は付き合っている暇がなかった。得意先への納品の日だった。午前中に所沢まで行かなければならなかった。
「自分で探しに行っといで。どうしてもなかったら、またサンダルでお行き。お金上げとくから、帰りに新しいの買っておいで」
そう言って恵子は出かけてしまった。
帰宅したのは午後一時ごろだったろうか。守はまだ朝と同じ姿勢で上りがまちのところに蹲っていた。
「どうしたの?」
恵子は声を荒げて言った。
守は唇を堅く結んだまま答えなかった。
恵子は守の両肩をつかみ、
「どうしたの。訳を言いなさい。何が不服でそんな悪たれをするのか、言いなさい」
と揺さぶった。
が、守は、目をつぶって、涙の粒をしぼり出しながら黙りつづけた。
自分が、子どもとの心の通わせ合いの少ない母親だとは、恵子は思っていない。
夫が家を出てしまった後ずっと仕事のきりもりをしてきたので、家事や子育てに使える時間は少なかった。

でも、そんな中でも三度の食事は必らず三人の子たちと一緒にするようにしたし、母親参観日や学校の行事の参加も欠かしたことがなかった。

守と姉の初枝の行っている中学でも、登校拒否とか性非行といった親の困惑例は多く報告されていた。

「子どもが学校で感冒をうつされるように、それに染まらないともかぎらない。ある日からわが家にも、そうしたわずらいが上陸してこないともかぎらない……」

そんな不安が心をかすめることもあったけれど、でも、現実のものになってしまうなどとは考えられなかった。

二足目の靴を買ってやった翌日は、守は青ざめた顔をして登校した。

ほんとうに学校へ行っているのかどうか気になって、初枝に確かめるように言っておいたから、守が一日分の授業を全部受けて戻ってきたことは確かだった。

が、その次の日。靴は三たびなくなったのだ。

「そんなばかなことが、あるわけないじゃないの」

恵子は、かっと頭に血がのぼって、ヒステリックに叫んでしまった。

すると守は、サンダルもはかずにわざとはだしで、家のまわりから、はては工場の中まで、うろうろ探して歩くのだ。

工場の中には無数のガラス片が散らばっている。どろどろのガラス種が燃えている熔解炉もある。

「危い。出てきなさい。出てきて、お母さんに、はっきり理由を言いなさい。何があって学校へ行きたくないのか、言いなさい」

恵子は叫んだ。

が、守は、踵から血を流したまま、なおも唇を結んで、工場の中を歩きまわる。

後から羽交い締めにして、抱え上げるようにして連れ出した。

守は中学一年生にしてはそれほど身体が大きくない。

大柄な自分の身体に恵子は自信がある。自分の腕力なら、まだ言うことをきかせられるだろうとたかをくくっていた。

が、暴れる息子の身体は、肉の内側に何かふしぎな鋼のバネでもひそませているように、ばか力があった。

へとへとになって上りがまちまで守を押して行き、腰かけさせた。

そうしているうちに、初めの怒りが退いてゆき、恵子はひどく物悲しい気持になってしまった。

バケツに水を汲み、手ぬぐいでよく拭いて、バンドエイドを貼ってやった。

「もういいから……今日は、風邪で休むと言っておいてあげるから、部屋でゆっくり横になってらっしゃい」

恵子は言った。

守は、立ち上り、二階の自分の部屋の方へ歩き出すとき、わざと大げさに足を引きずってみせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com